

公開講演2(PL2)

琉球方言音声・アクセントの諸相

上野 善道（東京大学名誉教授）

1. はじめに

本講演では、琉球方言の音声・アクセントの特徴的な側面を取り上げる。音声（分節音）面については、子音では、喉頭化音（無気音）と非喉頭化音（有気音）、声門閉鎖音の有無の対立、語頭重子音（長子音）、唇歯音、無声鼻音、ガ行鼻濁音、各種のL音や舌さきふるえ音を含むラ行子音の変種、前鼻音子音の通時的反映等、母音では、母音体系、各種の中舌母音とその由来等を、音節構造ではCVCの閉音節の存在を話題にする予定である。

しかし、去る7月7日にこの沖縄国際大学で開かれた沖縄言語研究センター40周年記念の講演「これまでの琉球方言アクセント研究とこれから」の中で、「これまでの研究」の第1期（戦前）として、服部四郎、平山輝男と並んで、従来ほとんど注目されて来なかった大湾政和（1933, 1937a,b）の那覇アクセントの記述¹を見直す必要があるが、詳細は日本音声学会の講演で行なうとした。それを承けて、かなり込み入った論になる関係で事前の配布資料が必須と思われるその分析に専ら予稿集の紙面を使い、他は当日のスライドに譲る。

2. アクセント

2.1. 大湾政和による母方言那覇アクセントの記述

沖縄県師範学校の教諭であった大湾の那覇市内の出身字と生年は未詳であるが、那覇市は「今日は泊・垣花・壺屋を除いて殆んど同一アクセントとみてよい」（1933: 14）とあることから、市内中心部のどこかと推定される。刊行年から見て、生まれは明治に違いない。

当時のアクセント3段観に従って「上中下」を上線、無印、下線で示しているが、適宜、〔上昇〕、〔下降〕の記号に置き換え、問題の箇所はそれと注記する。そのカタカナ表記は、長音（ー）を明示する表記に改める。アチョオル→アチョール、カアチイ→カーチー、ンンス→ンースなど。ヂ→ジに。なお、キィ=ji、ヲゥ=wuとし、ウィ=?wiである。

2.2. 2モーラ語～6モーラ語の型の一覧

2.2.1 CVCVの2モーラ2音節語は、単独では〇〇型（無印は中中型）1つであるが、助詞ヌ（が）、ヤ（は）を付けると(1)のように三分されるという事実を初めて報告している。多数派優先の配列順を、現在使われているA類、B類、C類に相当する順に並べ替えて示す²。特殊拍の振る舞いが見えやすいように、一般拍は〇で、特殊拍は「一、ン、イ、ッ」

¹ 服部四郎（1959[1937]）は、大湾（1937a）を取り上げ、那覇と首里等のアクセントの違いを住民の集団的移動によるする想定と、アリ・ヨリに当たる動詞の由来に関する説とを批判しているが、那覇方言のアクセント記述の内容には何も言及していない。他にも内容を論じたものは未見。

² 「船」はC類であるが、これと同じ振る舞いをする単語は少なく、その語彙リスト（第5節アクセント語彙）を見ても、第3類語や漢語も含む「朝、麻、アトゥ（後、跡）、イグ（以後）、海、

で示した音構造も下に並べる。ンカシ (昔) など、それ自身で1音節となるンは○とする。

- (1) ルシヌ (友が), アミ[ヌ (雨), [フ]ニヌ (船); ルセー (友は), ア[メー, [フ]ネー
○○ヌ ○○[ヌ [○]○ヌ ○○ー ○[○ー [○]○ー

2モーラ1音節語は、長母音 CVV の場合、1つの単独形○ー型が(2)のように2つに分かれるのみである³。「カー」など、元 CVCV の「川」由来でも同じ振る舞いをする。長音節内での音調変動はない(1937a: 26)。また、[○ー]ヌ/ヤは、構造上ありえないと見る(後述)。

- (2) カーヌ (井戸が), ティー[ヌ (手); カーヤ (井戸は), ティー[ヤ
○ーヌ ○ー[ヌ ○ーヤ ○ー[ヤ

ところが、ンに終わる CVN の単語は、単独で同じ○ン型が(3)のように3つに分かれる。

- (3) タンヌ (炭が), ジン[ヌ (銭), [ビン]ヌ (瓶); タノー (炭は), ジ[ノー, [ビ]ノー
○ンヌ ○ン[ヌ [○ン]ヌ⁴ ○○ー ○[○ー [○]○ー

[○ン]ヌ型は、「瓶」の他に「ブン (盆), ムン (紋), パン, ピン, ペン」があり、語頭

膿, グミ (ゴミ), 匙, 時期, チミ (罪), チユ (露), 梨, ヌミ (蚤, 鑿), ムン (紋), バサ (馬車), 春, 輝, ビワ (枇杷), 瓶, フニ (船, 骨), ブン (盆), ヤニ (脂), 弓, ルマ (土間), 和歌」が出ているだけである。「浜」も本文にはそれとあるも(1937a: 27), その語彙リストにはハマとある。他の諸方言でC類に属する(可能性のある)単語の大半は、第1音節が長母音の○ー[○で現われる。例: イーチ (息), イーチユ (糸, 絹), イービ (指), ウーク (奥), ウーシ (臼), ウービ (帯), カーギ (蔭, 容姿), カーミ (甕), クーシ (菓子), クーガ (卵), グーシ (竹串), クーブ (昆布), サージ (鉢巻), シーシ (獅), シージャ (兄), タービ (足袋), ティーラ (太陽), ティール (笹), ナーカ (中), ナーフア (那覇), ナービ (鍋), ニーブ (柄杓), ヌーシ (主), ハーイ (針), ハーチ (鉢), ハーマ (浜), フール (便所), ホートウ (鳩), マーイ (鞠), マーク (幕), マース (塩), マーミ (豆), ムーク (聾), ムートウ (元, 本家), ヤーマ (畏), ユール (夜), キーン (縁側), ヲウーキ (桶), ヲウーヌ (斧), ンース (味噌), ンーチャ (土), ンージュ (溝)。Cf. ク[ルー (黒), シ[ルー (白); ヌージ (虹); チーバ (牙)。³ ○ー○と同じ型(その後のa類)は「胃, キイー (柄, 亥), ウー (卯), キー (毛), ケー (筍), シー (瀬, 詩), ジー (芯), チー (気, 血, 釣瓶), 痔, 名, ニー (音, 値), ファー (葉), フィー (日), フー (帆, 麩), ブー (歩), 間, 実, 巳, ムー (藻), ユー (代), 利 (利子), ウイー (上), トー (籐, 唐), ルー (櫓, 龍, 自分), フェー (灰), メー (飯)。

○ー[○と同じ型 (b類) は、「木, クー (粉), シー (酢), 田, チー (乳), 菜, ニー (荷, 根), ヌー (野), 刃, 齒, フィー (火, 尻), ミー (目), ユー (湯, 夜), キイー (絵), グー (碁), ジー (地, 字), セー (鰕), 茶, フー (果報), モー (野原), ヤー (矢, 家), 輪, ヲウー (尾, 苧), アー (泡), カー (皮), クィー (声, 杭), クェー (肥え), ジュー (尾), チュー (今日), ソー (竿), トー (塔), フェー (南), 棒, メー (前), レー (代償), ロー (蠟), ヲー (王)」。なお, ヲウー (緒), ガー (我) は, 1937a と b で違い, どちらか不明。

⁴ 1937a: 28 の例と同: 32 の表では[ビ]ンヌなれど, 「助詞ガを続けると上上下下型になりハを続けると上下下型となる」とあることからの判断。両方が同じ型ならこういう書き方はしないはず。

が両唇音の単語のみという。[オン]ヌの可能な撥音は、長音とは振る舞いが異なる。

2.2.2 3モーラ語は(4)の7つの型が見つかり(大和と宝は同一視)、しかも大きな交替を起こす。この交替現象の記述も大湾が最初である。ただし、ここからは、助詞付き形の記述が少なくなる。() 内に入れた助詞付き形は私の推定形。他に、両著の間、ないしそれぞれの中で、記述の矛盾と見られる箇所も出てくる。1933 はガリ版刷りで、とりわけその音形を表示したローマ字は判読困難な箇所もある。また、同書は上中下のいわば3線譜状に示しているが、「中」線のすぐ上にあるものとすぐ下にあるものの別は有意か不明で、事実上無視する。なお、(4)以下の配列は、型の姿を考慮して並べた。

(4) 単独形	～が	～は	他の語例 (注記も含む)
マチヤ (店)	マチヤヌ	マチヤー	フクイ (埃), ハンタ (端), カチュー (鯉)
ヤマ[トゥ (大和)	ヤマ[トゥヌ	(ヤマ[トー)	カニ[ク (兼久=地名), ホー[トゥ (鳩)
タカ[ラ (宝)	(タカ[ラヌ)	タカ[ラー	(「大和」型は固有名のみともあるが。)
グ[ユー (御用)	グユー[ヌ	(グユー[ヤ)	ウ[コー (お香), ク[ルー (黒) 等。
ナガ[ニ (背骨)	ナ[ガ]ニヌ	ナ[ガ]ネー	ハカ[マ (袴), フク[ル (袋) など多数。
ク[ムイ (池)	ク[ム]イヌ ⁵	ク[ム]エー	トゥ[スイ (年寄り。助詞付形記載なし)
ハ[サン (鉄)	ハ[サン]ヌ	ハ[サ]ノー	ガ[ジャン (蚊), ア[ダン (植物) 等。
マー[チ (松)	([マー]チヌ)	[マー]チェー	(おそらくナン[カ (七日) 等々も。)
	(アシ[ジャ (下駄),	アチ[キ (熱気) は,	アシ[ジャヌ (主), ア[シ]ジャヌの両様に。)

音構造表示

○○○	○○○ヌ	○○○ー	
○○[○	○○[○ヌ	○○[○ー	
○[○ー	○[○ーヌ	(○○ー[ヤ)	
○○[○	○[○]○ヌ	○[○]○ー	
○[○イ	○[○]イヌ	○[○]○ー	
○[○ン	○[○ン]ヌ	○[○]○ー	
○ー[○	([○ー]○ヌ)	[○ー]○ー	(○ン[○, ○ッ[○, ○イ○)

上昇のある型では、語末が特殊拍(M)の語は○[○M となり (1937a: 28)、その M が長母音か二重母音副音か撥音かにより、助詞付き形が異なる振る舞いをしている。一方、○M[○ では、ナン[カ (七日), ウッ[トゥ (弟), クイ[ミ (暦) も含め、同じ振る舞いをすると見る。この方言では、二重母音の中で下降する場合を除き、重音節全体としてその中で音調が変わることはない。なお、単独形に[○]○○は報告されていない。また、2.4.1 に後述の

⁵ ナガニとクムイ (籠もり) に関して、「中中上型, 中上上型が助詞に続くと共に中上下下型に変わり二者の区別は不能になる」(1937a: 29) とある。ちなみに、垣花方言ではク[ムイ]ヌとなる。

理由で○[○]○, [○○]○型は存在しないものと考えられる。[○ー]ヌ/ヤの不在も同様。

2.2.3 4モーラ語には(5)の型が出ている。助詞付き形の情報はさらに減り、助詞付きでは異なる型になると予想されるものも単独形の同じ型の中にまとめて掲げられている。私見でそれを分けて掲げる。特殊拍を含まない○○○[○型は記載がなく、存在しないものと見た。5モーラ以降の例から見てその可能性のある、後部が3モーラ語（で、かつ最後が重音節でないもの）からなる複合語のティウ[クリ（手遅れ）、ユフ[カシ（夜更かし）なども、最終拍だけが高くなる型では出ていないからである。最終拍だけが低い型は、その前が重音節の○○M[○構造ばかりである。

(5) アカガイ（明るい所）	アカガイヌ	アカガイヤ	アチカビ（厚紙）
[ウミ]ンチュ ⁶ （海人）	([ウミ]ンチュヌ)	([ウミ]ンチョー)	
[カー]チー（夏至）	[カー]チーヌ	[カー]チーヤ	[キイー]ムン（良物）， [シン]パイ(心配) ⁷
ウ[グ]シク（お城）	(ウ[グ]シクヌ)	ウ[グ]シコー	ウ[トゥ]スイ（老人） ⁸
ター[リー]（大人）	ターリー[ヌ	(ターリー[ヤ)	ハク[ソー]（百姓）
ラン[ガサ]（洋傘=蘭傘）	ラン[ガ]サヌ	ラン[ガ]サー	アカ[チチ]（暁）
バサ[ナイ]（芭蕉の実）	(バサ[ナ]イヌ)	(バサ[ナ]イェー)	ティガ[カイ]（手掛かり）
アサ[バン]（昼飯）	(アサ[バン]ヌ)	(アサ[バ]ノー)	チン[ナン]（蝸牛）
アチョー[ル]（仲買人）	ア[チョー]ルヌ	ア[チョー]ロー	ヒコー[キ]（飛行機）
ユカッ[チュ]（士族）	(ユ[カッ]チュヌ)	(ユ[カッ]チョー)	（極少数とある）
チコン[キ]（蓄音機）	(チ[コン]キヌ)	(チ[コン]ケー)	

音構造表示

○○○○	○○○○ヌ	○○○○ヤ	
[○ー]○ー	[○ー]○ーヌ	[○ー]○ーヤ	
[○○]ン○	([○○]ン○ヌ)	([○○]ン○ー)	
○[○]○○	(○[○]○○ヌ)	○[○]○○ー	○[○]○イ, ○[○]○ー
○ー[○ー	○ー○ー[ヌ	(○ー○ー[ヤ)	○○[○ー
○ン[○○	○ン[○]○ヌ	○ン[○]○ー	○○[○○

⁶ ンの直前で音調が変わる唯一の例だが、[カー]チーと同じとあり、語彙リストにもあるので誤植ではないと判断。「の」由来よりも、語頭3モーラが高くはならないという制約のためと見る。

⁷ この型は、「朝晩、アトゥサチ（後先）、イチシニ（生死）、ウミヤマ（海山）、カチマキ（勝ち負け）、タティユク（縦横）、ユルフィル（夜昼）」の対比語が多い。他に「アルトゥチ（ある時）」がある。また、[カー]チーの上上下下に対して、[キイー]ムンと[シン]パイは上上中中とあるも、語彙リストには「心配」は上上下下とあり、同一扱いする（「良い物」はリストになし）。

⁸ この型は、敬称の接頭辞「ウ（御）」が付いたものばかり、とある。後部要素は、グシ[ク]（城）、トゥ[スイ]（年寄り）、マチリ（祭）で、アクセントの型は無関係。なお、「お送り」は[ウー]クイとなる。ただし、語彙リストには、ウ[ク]サン（奥さん）の例も出ている。

○○[○イ	(○○[○]イヌ)	(○○[○]○ー)	
○○[○ン	(○○[○ン]ヌ)	(○○[○]ノー)	○ン[○ン
○○ー[○	○[○ー]○ヌ	○[○ー]○ー	
○○ッ[○	(○[○ッ]○ヌ)	(○[○ッ]○ー)	
○○ン[○	(○[○ン]○ヌ)	(○[○ン]○ー)	

2.2.4 5モーラ語を集めると(6)のようになっている。単独形と助詞付き形で掲載語例の異なるものも出てくる。語彙リストも参照しつつ引く。助詞付き形は、ほとんどが()付きになる。以下、「が/は」を問わず、助詞付き形はまとめて示す(長音終わりが「は」の例)。後部要素が3モーラ語のものには、音構造表示ではその境界の前に「|」を付けて示した。

(6) ニータムン (間食)	ニータムノー	
マタンマガ (曾孫)	マタンマ]ガー	(ンは音節形成音。ンマガは孫)
[コー]グワーシ (落雁=粉菓子)	[コー]グワーシエー	
フィラ[ファ]グサ (おおぼこ)	フィラ[ファ]グサー	
ウー[シ]バー (臼歯)	(ウー[シ]バーヌ)	
ウェー[キン]チュ (金満家)	(ウェー[キン]チュヌ)	
チンチ[ナー] (ひばり)	チンチナー[ヌ	アタビ[チャー (蛙)
シジリ[バク (硯箱)	(シジリ[バ]クヌ)	
クミヲウ[ルイ (組踊)	クミヲウ[ル]イエー	
マルヌ[ムン (間食)	(マルヌ[ムン]ヌ)	
ウーンカ[シ (大昔)	(ウーン[カ]シヌ)	(ンは音節形成音。ンカ[シ)
ティーサー[ジ (手拭)	ティー[サー]ジェー	
ヤマトウン[チュ (日本人)	(ヤマ[トウン]チュヌ)	

音構造表示

○○○○○	○○○○○ー	
○○○○○	○○○○]○ー	
[○ー]○ー○	[○ー]○ー○ー	
○○[○]○○	○○[○]○○ー	
○ー[○]○ー	(○ー[○]○ーヌ)	
○ー[○ン]○	(○ー[○ン]○ヌ)	
○ン○[○ー	○ン○○ー[ヌ	○○○[○ー
○○○[○○	(○○○[○]○ヌ)	
○○ ○[○イ	○○○[○]○ー	
○○○[○ン	(○○○[○ン]ヌ)	
○ー ○○[○	(○ー○[○]○ヌ)	

○ー|○ー[○
○○○ン[○

○ー[○ー]○ー
(○○[○ン]○ヌ)

ここで注目されるのは、ニータムンとマタンマガが単独では同型であるのに、助詞（は）が付くと別になり、前者はそのまま続くのに対して、後者は「中」の位置から第4モーラの後で下がるとある点である。大湾は、両者を「平板式」に含めている。また、シジリ[バクとウーンカ[シの語末の上昇位置の違いも問題になるが、これには後部要素が2モーラ語の「箱」であるか3モーラ語の「昔」であるかが関与している⁹。後に再述する。

2.2.5 最後に、**6モーラ語**は(7)の通り。ここになると、キイーニー]ブイ（居眠り）のように、単独形でも「中」で始まって最後の2モーラが低くなる型が数例出てくる。他に、マユナカ]グル（真夜中ごろ）、ヤナシン]シー（悪い先生）、ヤナワラ]バー（悪童）がある。

また、助詞付き形で語末2モーラが下がるクンチブスク（根気不足）に対して、(6)の語末まで下がらないニータムン（間食）に当たる例の有無については何も記載がない。

もう一つ、単独形は記載はないが、キイー]シンシーヤ（良い先生は）の例がある（1933: 22。厳密にはキイーは「中線の上」で、キイーニー]ブイエーの「中線の下」とは異なる）。一方で、類例の[キイー]ムン（良い物）は上上中中とある。「良い先生」は2アクセント単位の可能性もあるが、(6)の[コー]グワーシ（落雁=粉菓子）に当たる例と見て挙げておく。

6モーラ語で記載のない助詞付き形は、5モーラ語までの類推で推定した。それと異なるまとめ方をしていると見られる箇所（1937a: 33）もあるが、単純に多数派にまとめたものと見ておく。なお、7モーラ語については名詞の例は掲載がない。

- (7) クンチブスク（根気不足） クンチブス]コー
キイーニー]ブイ（居眠り） キイーニー]ブイエー（助詞付き形は 1933: 22）
(キイー]シンシー)（良い先生） キイー]シンシーヤ（良い先生は）（語頭は [か]
ア[ワ]リナムン（哀れな者） (ア[ワ]リナムンヌ) (2アクセント単位形か?)
ウ[ルン]トゥンチ（御殿殿内） ウ[ルン]トゥンチェー
ンカ[シ]バナシ（昔話） (ンカ[シ]バナシヌ)
ウヤ[チョー]レー（親兄弟） (ウヤ[チョー]レーヌ)
サーター[ヤー]（砂糖屋） (サーターヤー[ヌ] タバクイ[リー]（タバコ入れ）、
チレーク[ニー]（人参=黄大根根）
サーター[ダル]（砂糖樽） サーター[ダ]ロー
ククルア[タイ]（心当たり） (ククルア[タ]イヌ)

⁹ この現象の指摘は、那覇市の中心部とは異なる垣花方言についてではあるが、すでになされている。「複合語をつくり出す場合に、うしろに結びつく語が奇数のモーラの語であるか、偶数モーラの語であるかによって、そのアクセントの音声的な型が左右される。」（比嘉政夫 1960: 36）。

チーチー[ビン (牛乳瓶=乳瓶) (チーチー[ビン]ヌ)
 ウシルシガ[タ (後ろ姿) (ウシルシ[ガ]タヌ)
 ウムティゲー[イ (表替え) (ウムティ[ゲー]イヌ) クムイリン[チ (曇り天気)

音構造表示

○○○○○○	○○○○○○]○ー	
○○○○]○○	○○○○]○○ヌ	
(○ー]○ン○ー)	○ー]○ン○ーヤ	(語頭は [か)
○[○]○○○ン	(○[○]○○○ンヌ)	
○[○ン]○ン○	○[○ン]○ン○ー	
○○[○]○○○	(○○[○]○○○ヌ)	
○○[○ー]○ー	(○○[○ー]○ーヌ)	
○ー○ー[○ー	(○ー○ー○ー[ヌ) ○○○○[○ー, ○○ー○[○ー	
○ー○ー[○○	○ー○ー[○]○ー	
○○○ ○[○イ	(○○○○[○]イヌ)	
○ー○ー[○ン	(○ー○ー[○ン]ヌ)	
○○○ ○○[○	(○○○ ○[○]○ー)	
○○○ ○ー[イ	(○○○ [○ー]イヌ) ○○イ ○ン[○	

2.3 アクセントの対立数

2.3.1 2モーラ語は、単独では1種類に中和しているが、助詞付きでは3種類に分かれる。ただし、長母音を含む語は2種類しか対立がない。

2.3.2 3モーラ語になると、特殊拍の振る舞いも絡み、複雑な交替を見せる。まず、マチヤ(店)の系列は問題ない。ヤマ[トゥ(大和)とタカ[ラ(宝)は、単独形はナガ[ニ(背骨)と同じであるが、助詞付きの形がヤマ[トゥヌ対ナ[ガ]ニヌで異なり、アシ[ジャ(下駄)のように助詞付きで両型を併用するものもあることから、ナガ[ニと対立する別の型としなければならない。語末が長音で終わるグ[ユー(御用)は、ヤマ[トゥと音構造の面で相補分布をなし、平調である長音節ゆえに取った音調と見られ、音韻的に同一の型とする。

一方、ナガ[ニは、助詞付き形がナ[ガ]ニヌと大きく交替する。ク[ムイ(池)とハ[サン(鉄)は、ク[ム]イヌ、ハ[サン]ヌとなるが、二重母音副音と撥音から予測可能な相補分布をなしている。マー[チ(松)も、[マー]チヌと大きく替わるが、これも長音節はその内部に音調変動を含まないことにより説明可能である。ナン[カ(七日)、ウツ[トゥ(弟)、クイ[ミ(暦)も同様の交替をするものと見る。要するに、これらの助詞付き形は、その文節の前次末モーラ(一③)が中核となり、それを含む音節全体が高くなるのである(下降に関しては二重母音を除く)。従って、ナガ[ニ、ク[ムイ、ハ[サン、マー[チは、いずれも音韻的に同一の型と認定される。

ちなみに、先述のグ[ユー]の語末長母音形は、一見、ク[ムイ]、ハ[サン]と語末重音節内の相補分布でまとめられそうにも見えるが、助詞付き形が例外なく上昇が後ろにずれて、グユー[ヌ]と最後の助詞が高くなる。これを、下降が前にずれるク[ム]イヌと、さらには上昇・下降ともに前にずれるナ[ガ]ニと一緒にすることは、音声的に無理である。

従って、結論として、3モーラ語には、2モーラ語と同じく3つの型があることになる。ここまでの段階では、那覇方言は三型アクセント体系であると思われるかもしれない。

2.3.3 しかし、**4モーラ語の(5)**では対立数が増える。アカガイは問題ない。ター[リー] (大人) は、3モーラでの相方となっていた○○○[○~○○○[○ヌ (語末長母音を含まない型) が欠落しているものの、その助詞付き形の音調から、やはり他とは別の型と見る。

ラン[ガサ] (洋傘) からアサ[バン] (昼飯) までの語末2モーラの上昇に対して、アチャー[ル] (仲買人) 以下は、重音節は平調を取るという制約により最終モーラだけが上昇しているもので、しかもそれらの助詞付き形が、いずれもその文節の前次末モーラ (一③) を中核として高くなり、それを含む (やはり二重母音を除く) 音節全体が高くなっていることから、ラン[ガサ]からチコン[キ] (蓄音機) まではすべて音韻的に同一の型と解釈される。

問題となりそうなのは、注6にも触れた[ウミ]ンチュ (海人) である。しかし、ンの問題はあっても、何ら問題のない[ウミ]バタ (海端) も語彙リストに載っており、形態条件は違っても、ウ[グ]シク (お城) とは自ずと別の型となる。残る[カー]チー (夏至) は、ウ[グ]シクと相補分布によりまとめる案も可能であるが (注8「お送り」の[ウー]クイも参照)、著者は[ウミ]ンチュと同一扱いしており、その内省に従うべきであろう。

結論として、アカガイ；ター[リー]；ラン[ガサ]からチコン[キ]まで；[ウミ]ンチュと[カー]チー；そしてウ[グ]シクと、4モーラ語には5つの対立が認められることとなる。

2.3.4 **5モーラ語の(6)**に移る。まず、シジリ[バク] (硯箱) 以下については、既述のように、複合語後部要素のモーラ数が2モーラか、3モーラか (「箱」かウーンカ[シ]の「昔」か) によって決まる。ただし、クミヲウ[ルイ] (組踊) の「踊り」については、語末が二重母音であるという音韻条件の方が優先される。また、ティーサー[ジ] (手拭) については、後部が3モーラ語であり (サー[ジ]、鉢巻き)、また、次末重音節語であることから、この型しかありえない。どちらの場合も、助詞付き形は、文節前次末モーラが高さの中核となり、その音節構造により、シジリ[バ]クヌ、ウーン[カ]シヌ、ティー[サー]ジェーのように音調型が決まる。ウーンカ[シ~ウーン[カ]シヌは大幅な交替に見えるが、その仕組みは他と同じである。従って、例外がない限り、両者は音韻的には同じ型と解される。

実際、その語彙リスト等を見ると、(8)と(9)のようになっていて例外はない。(6)の既出語と、アシビ[ニン] (遊び人)、アトマー[シ] (後回し)、イチム[ルイ] (行き戻り) のような音節構造から自明なものは除く。6モーラ語にも当てはまるもので、その一部を加えておく。「水盃」は「水」と「盃」に別れるが、その「盃」の最後の形態素「つき」が問題となる。

- (8) アシビ[グトウ (遊び事), アンラ[ムシ (油虫), ウムイ[クミ (思い込み), カタキ[ウチ (敵討ち), ククル[ガキ (心掛け), ククル[ムチ (心持ち), コーリ[ガシ (高利貸し), トゥーイ[ミチ (通り道), ローグ[バク (道具箱); アマライ[ミジ (雨垂れ水), ウランダ[グチ (西洋語), ジュールク[ニチ (十六日), ミジサカ[ジチ (水盃), ...
- (9) イチワカ[リ (生き別れ), ウヤググ[ル (親心), ウヤユジ[リ (親譲り), タチバナ[シ (立ち話), タビジタ[ク (旅支度), チラユグ[シ (面汚し), ティーブク[ル (手袋), ハギチブ[ル (髡げ頭), ムヌワシ[リ (物忘れ); ウシルシガ[タ (後ろ姿), ケーシムル[シ (釣り銭, 返し戻し), チュクイバナ[シ (作り話), ...

この表面的な差を生み出している仕組みは、私見では、後部形態素の語頭から2モーラ単位の「フット」を形成し、単独形においては最終フットを高くすることによると考えられる。詳しく言うと、フット形成には重音節も関与し、重音節は自動的に1フットとなる。従って、(4)の例では、(ナガ)(ニ), (ク)(ムイ), (ハ)(サン), (マー)(チ), (8)の例ではアシビ-(グトウ), (9)の例ではイチ-(ワカ)(リ)というフットが形成されることになる。1モーラも不完全であっても1フットを形成すると見る。前部要素はここでは問題としない。

ただし、2.2.3で触れた、ティウ[クリ (手遅れ), ユフ[カシ (夜更かし) など、前部要素が1モーラの場合は、後部が3モーラ (遅れ, 更かし) であっても、この規則は当てはまらない。4モーラ語はフット形成に当たっては複合語扱いされず、形態素境界とは独立に、(ユフ)([カシ) のように2モーラフット2つからなると扱われるものと見る。

戻って、フィラ[ファ]グサ (おおぼこ), ウー[シ]パー (臼齒), ウェー[キン]チュ (金満家) は語頭から3モーラ目が高さの中心となり、最後の形はそれを含む撥音節全体が高くなる。その結果、助詞付き形のウェー[キン]チュヌはティーサー[ジの交替形ティー[サー]ジェーと中和するが、元の型は別である。[コー]グワシは、もとより、これらと対立する別の型である。

もう1つの問題、「ニータムン」と「マタンマガ」に関しては、その1933:21に助詞付き形が1例ずつ出ているだけで、1937a,bには記載がなく、当初はこの区別を見落としていたくらいであるが、5モーラ以上の動詞ではこの区別が挙げられており¹⁰、6モーラ名詞にも例がある以上、存在は確かと見る。この分析は次節に譲り、ここは両者は同型と扱うことにする。

こうして、[コー]グワシ; フィラ[ファ]グサからウェー[キン]チュが同じ; チンチ[ナー; シジリ[バクからヤマトウン[チュが同じ, それに、ニータムンとマタンマガは同一扱

¹⁰ 動詞には触れる余裕がないが、私の分析では名詞とは条件がまったく異なる。まず、複合動詞の場合は、前部が無核型、後部が4モーラ4段活用語 (そのアクセントは無関係) に下降が現われる。ンミタティーン (埋め立てる) に対するンミアー]スン (埋め合わす) を参照。なお、7モーラ語に2例しかないが、後部が5モーラ語の場合は一段活用でも下降が現われている。今一つは、ウイケー]スン (売り買いする) のようなサ変動詞である。ただし、アマーカスン (甘やかす) 対ユクテー]ユン (横たえる) のように、単純動詞では今のところ予測が困難である。

いできることになると、5モーラ語には5つの対立があることになる。

2.3.5 同様にして、(7)は、クンチブスクとキーンニー]ブイが同一扱いきるとし、[キーン]シンシーも1単位形だとすれば、ア[ワ]リナムンはウ[ルン]トゥンチと同一（仮にア[ワ]リナムンが2単位形として外しても対立数には影響せず）、ンカ[シ]バナシとウヤ[チョー]レーが同じ、サーター[ヤーは別、そしてサーター[ダル以下はすべて同一となると、6モーラ語には5つの対立があることになる。

2.3.6 未証明の部分は残るが、**那覇市方言は五型アクセント体系である可能性**があることになる。5、6モーラ語の解釈次第では多型アクセントの可能性も残すものの、三型アクセント体系ではないことは確実である。今回もまた、南琉球とは異なるアクセント体系が北琉球に見つかったことになる。

2.4 複雑な交替の背後にある2つの仕組み

このかなり込み入った分析をすることになった体系の背後にある仕組みを考えてみよう。

2.4.1 まず、すでに指摘があるように、この方言には独自の制約がある。金田一春彦(1975[1960]: 142)に「琉球語のアクセントには内地諸方言のアクセントには見られない一つの特色があると思う。それは、《○●○調または●●○調のような、最後の1音節だけを低める音調を嫌う》という傾向が強いことである」と書かれてある現象で、那覇方言の○●●型[ただし、○○●型とは別と見ている]に1音節の助詞を付けると○●○△型になることを指摘し、単独の場合に○●○型であるはずのものが○●●型になっているのだと解している。同じ主旨を、比嘉政夫(1960: 30, 37)も「最後から2番目のモーラには核はこない」と述べている。

以下、これに基本的に同意した上で私なりの解釈をする。厳密に言うと、これは(単語単独を含む)文節単位で適用されるもので、その②の位置での下降を禁ずる「文節次末下降禁止制約」(略して、下降位置制約、下降制約などとも)と呼ぶことにする

(5)から見ていく。ラン[ガサ、バサ[ナイ、アサ[バン、アチョー[ル、ユカッ[チュ、チコン[キは、古くは *ラン[ガ]サ、*バサ[ナ]イ、*アサ[バ]ン、*アチョ[一]ル、*ユカ[ッ]チュ(～*ユ[カ]ッ)チュ、*チコ[ン]キであったと考える¹¹。すべて同じ型である。その単独形の次末位下降が制約によって保てなくなったことを受けて、その代わりに最終フット全体を高くする変化が生じた。*(ラン)([ガ]サ)>(ラン)([ガ]サ)、*(バサ)([ナ]イ)>(バサ)([ナイ)、

¹¹ この段階ですでに重音節全体が高い*ア[チョー]ル、*ユ[カ]ッ)チュ、*チ[コン]キになっていたとしても構わない(特に*ユ[カ]ッ)チュはその方が自然)。それでも*ラン[ガ]サと音韻的には同じ型である。その場合は、最後に重音節制約は不要で、より簡単になる。他の長さでも同様である。ただ、フット内で上昇し、特殊拍の場合はより不安定で最終フットへの移行がしやすい案を本文には掲げてみた。後述のグ[ユー<*グユ[一]などの変化も考えてのことである。

* $(アサ)([バン]) > (アサ)([バン])$, * $(ア)([チヨ[-]])(ル) > (ア)([チヨ-])([ル])$ などで、その結果が現在の単独形である。ところが、1モーラ助詞付き形は、この文節次末の環境から外れているために元のままラン[ガ]サヌなどで残った。その後、その高い部分を含む重音節は(二重母音を除き)音節全体が高くなったのが今のア[チヨ-]ルヌなどである。その際、ンだけはアサ[バン]ヌと下降制約を免れた。

(4)のナガ[ニ, ク[ムイ, ハ[サン, マー[チも, 元は*ナ[ガ]ニ, *ク[ム]イ, *ハ[サ]ン, *マ[-]チで、4モーラ語と同じく、* $(ナ[ガ])(ニ) > (ナガ)([ニ])$, * $(ク)([ム]イ) > (ク)([ムイ])$, * $(ハ)([サ]ン) > (ハ)([サン])$ などの変化を受けた結果が今の単独形である。ここでも、文節次末下降制約が働かない1モーラ助詞付き形はナ[ガ]ニヌ, ク[ム]イヌなど、元のまま残った。ただし、*ハ[サ]ンヌと*マ[-]チヌは、高い部分を含む重音節全体が高くなり、ハ[サ]ンヌ, [マー]チヌに変わった。

(6)(7)でも、これらに相当する型は同様である。たとえば(6)は、*シジリ[バ]ク, *クミヲウ[ル]イ, *ウーン[カ]シ, *ティーサ[-]ジ, *ヤマトウ[ン]チュなどである。

その意味で、これらは助詞が付くと交替が起こるのではなく、実は単独形の方が変化した結果なのである。助詞付き形は重音節の音調にわずかな変容が生じたに過ぎない。

なお、これらと対立するグ[ユー, ター[リー等は、*グユ[-]~*グユ[-]ヌ, *ターリ[-]~*ターリ[-]ヌ等で、その環境から、ここでは1モーラ助詞付きの方に文節次末下降禁止制約が掛かった結果、最終フットへ高さが移行して* $(グ)(ユ[-])(ヌ) > (グ)(ユ-)([ヌ])$, * $(ター)(リ[-])(ヌ) > (ター)(リー)([ヌ])$ となった。一方で、単独形の*グユ[-, *ターリ[-は、上昇を含んでいた重音節全体がそのまま高くなったのが今のグ[ユーなどの形である。並行的に、「大和」も *ヤマ[トゥで、*ナ[ガ]ニとは別だったことになる。

大湾は1モーラ助詞付き形しか記載していないが、私が20年前に垣花方言(話者は故比嘉政夫氏)で2モーラ助詞付き形を聞いた結果は(10)のようであり、(両方言がこの点に関しては同じであるとの想定の下での話であるが)先の推定を裏付ける。語例の異なる部分は、ガマ[ク(腰)はナガ[ニと、チチナガ[ミ(月見=月眺め)はウーンカ[シと、ヌク[ジリ(鋸)はラン[ガサと、アカチチ[ウキ(早起き=暁起き)はサーター[ダルと同じである。

(10) 垣花方言の例	1モーラ助詞ヌ	2モーラ助詞カラ
ガマ[ク(腰)	ガ[マ]クヌ	ガマ[ク]カラ
チチナガ[ミ(月見)	チチナ[ガ]ミヌ	チチナガ[ミ]カラ
ウシルシガ[タ(後ろ姿)	ウシルシ[ガ]タヌ	ウシルシガ[タ]カラ
ヌク[ジリ(鋸)	ヌク[ジ]リヌ	ヌク[ジリ]カラ
シジリ[バク(硯箱)	シジリ[バ]クヌ	シジリ[バク]カラ
アカチチ[ウキ(早起き)	アカチチ[ウ]キヌ	アカチチ[ウキ]カラ

要するに、文節次末(-②)の下降だけが許されないのであって、2モーラ助詞が付く

とその制約の対象外となり、その前の名詞は単独形と同じまま出現するのである。なお、これらの単独形も、文節次末下降制約と最終フットの高まりの変化を受けた結果である。

このように考えると、なぜ2モーラ語では3つの型が中和してしまうかの理由も見えやすくなる。(1)にルシヌ(友)、アミ[ヌ(雨)、[フ]ニヌ(船)の例を挙げたが、「船」は本来*[フニ]ヌで(垣花方言の[フニ]カラも比較)、それが下降制約で[フ]ニヌに変化したものである。となると、元の単独形は*[フニ]だったと推定される。一方、「雨」はアミ[ヌであることから、ナガ[ニと同様に、元は*ナ[ガ]ニと同じく*ア[ミ]ヌだったと考えられ、その単独形は*ア[ミ]となる。しかるに、上昇タイプの2モーラ単独形は語末フットに当たるので(ア[ミ])>([アミ])の変化が起こったと考えると、[フニとの区別が失われる。残るルシ(友=同志?)は、3段観では「中中」とされるものの、実際は垣花方言では京都方言などの「風、鼻」とほとんど同じで、「高平ら」と言って良いほどである¹²。そこから三者が合流するのは時間の問題だったことになる。

2.4.2 いわゆる平板式に見られる下降

最後に、(6)のニータムン(間食)～ニータムノーとマタンマガ(曾孫)～マタンマ]ガー、(7)のクンチブスク(根気不足)～クンチブス]コー、キイーニー]ブイ(居眠り)～キイーニー]ブイェーの扱いに移る。挙例はこれがすべてである。

私見では、関西方言の類推で言えば、語末が上昇するタイプ(低起上昇式に当たる)と同様、この非低起(分かりやすく言えば高起)平進式においても語末形態素が2モーラか3モーラかが絡んで来る。その関与の仕方がよく似ているのである。

このあとは語頭に[の記号を付けて明示的に示すと、(6)の[マタンマガは、本来*[マタンマ]ガと下降を持っていたと考える。その後部3モーラ形態素の-シマ]ガの形は、低起上昇式の*ナ[ガ]ニと上昇は違いますが下降に関しては同じである。「大昔」の*(0)-(シ)(カ)>(0)-(シ)(カ)の変化(無関係な前部要素は0で示す)に並行して、平進式の[-シマ]ガにおいても文節次末下降禁止制約が働いて*[0-(シマ)](ガ)>[0-(シマ)](ガ)となった結果、[マタンマガとして実現する(語末の下降]は、残っていたとしても音声的には実現しない)。その単独形を見るとあたかも下降など何の関係もないようであるが、それに1モーラ助詞が付くと、次末環境ではなくなるために本来の下降が姿を現わして[マタンマ]ガーとなるのである。すなわち、マタンマガは、いわば平進式の④型ということになる。

(7)のクンチブスクも同様で、本来は*[クンチブス]クなのだが、単独形では*[0-(ブス)](ク)>[0-(ブス)](ク)で下降が実現しなくなるものの、1モーラ助詞付きでは、次末位ではなくなるので元の下降がそのまま[クンチブス]コーと実現する。すなわち、(6)(7)の両語ともに下降の実現の有無は環境による変異に過ぎないことになる。両語に共通するのは、後部が3モーラ形態素で、その-②の位置に下降がある点である。

¹² 垣花方言の母語話者である比嘉(1960)が、この型を●●ではなく○○で表記しているものの、音韻表記では高くはじまる型に分類していることも参照。

では、(7)の[キイーニー]ブイ（居眠り）～[キイーニー]ブイェーはどうなるか。この下降は末尾から3モーラ目にあるので制約の影響は受けずにそのまま実現する。そして、ウー[シ]バー（臼歯）～ウー[シ]バーヌに見るように、語末から3モーラ目以前にある下降（とその前の上昇）は固定していて動かないので、助詞付きでも同じ位置のまま[キイーニー]ブイェーとなることの説明がつく。なお、「居眠り」のフットは[0-(ニー)](ブイ)で、「根気不足」の*[0-(プス)](ク)との共通性を探るとすれば、語末から2番目の「次末フットに下降が出る」となる可能性がある。それが言えるとなれば、外形の違いを超えて両者が一層同じ型と解され、違いは後部要素が3モーラか2モーラかだけとなりうる。

しかしながら、最後に残った(6)の[ニータムン]は難問である。この語源は未詳であるが、後半はムン（物、食べ物）の2モーラ形態素であるに違いない（類義語のマルヌ[ムンは「間の(食べ)物」]）。そうなると、もしもこれも次末フットに下降があるとしたら *[（ニー）(タ)](ムン)であり、制約を受けないのでそのまま下降が実現してしまい、事実と合わなくなる。助詞付き形も*[ニータ]ムノーとなるはずである。

そこで、別型の*[（ニー）(タ)](ムン)を出発点として、下降制約により下降が実現しなくなると見れば、単独形の[ニータムン]は引き出すことができる。しかし、助詞付き形は*[（ニー）(タム)](ノー)から[ニータム]ノーにしかならず、[ニータムノー]は導き出すことができない。このニータムノーの例は、1933: 21 にマタンマガーと隣り合って別の型として三線譜の上にならされており、誤記とは考えにくい。

それを受けて考えられることとしては、撥音が制約適用外となる CVN で終わり（これはすでに*[（ニー）(タ)](ムン)を立てる際に利用している）、かつ「は」助詞付き形が融合形になる場合に限り、元の*[（ニー）(タ)](ムン)の語末フットの下降を引き継いだ*[（ニー）(タム)](ノー)となり、これに下降制約が適用されて下降が実現しなくなって[ニータムノー]となる、とする案ぐらいである。しかしながら、類例はまったく挙がっておらず、今これを検証することはできない。

もしも具体例でこの案が否定されたとすると、残る解決案としては最初から下降のない*[ニータムン]を想定せざるを得なくなり、*[マタンマ]ガとは対立することになる。いわば平進式の中に下降の有無の対立があるとすると、6モーラ語にも同じことが予測され、アクセント体系が一層複雑になってくる。しかし、それを探る資料はない。そもそも本節のここまでの考察も、わずか4例に基づくものである。

最後の例が未確定のまま残ってしまい、体系全体を提示するところまで行かなかったものの、この80年以上も前の書かれた資料を見直すことによって、これまで知られていなかった体系の存在がほぼ確実に思ったと考える。今後のアクセント研究に対する一つの道標となり、那覇方言を深く研究する人が現われるとすれば幸いである。

[参考文献]

大湾政和（1933）『琉球方言資料』沖縄県師範学校郷土室内〔表紙には昭和7年とあるも、

続く 1937 の「序」に「昭和 8 年」とあるのに従う。奥付けに刊行月日はないが、昭和 7 年度の刊行で、昭和 8 年 3 月ごろかと判断。]

大湾政和 (1937a) 『語調を中心とする琉球語の研究』, 沖縄県師範学校.

大湾政和 (1937b, 1970) 「アクセントに現れた東京語と那覇語」伊波普猷先生記念論文集『南島論叢』, 沖縄日報社: 223-241. [1937a は 5 月, 1937b は 7 月の刊行となっているが, 1937a の第 4 章は同じ章題で内容も近く, またその序に「この小著の大半は未発表の論文であって」とあることから, 執筆は 1937b の方が早かった可能性がある。]

金田一春彦 (1975 [1960]) 「アクセントから見た琉球語諸方言の系統」『東京外国語大学論集』 7: 59-80. 『日本語の方言』教育出版: 129-157 に再録.

服部四郎 (1959 [1937]) 「琉球語管見」『方言』 7/10: 1-22. 『日本語の系統』岩波書店: 362-385 に再録. [岩波文庫版 1999 には再録されていないので注意]

比嘉政夫 (1960) 「旧那覇市垣花方言のアクセント体系」『国語学』 41: 28-38.